

天文学とプラネタリウム

第100回

今月のお題

「我々はどこから来たのか
我々は何者か
我々はどこへ行くのか」



www.tenpla.net

高梨直紘 (東京大学)
平松正顕 (国立天文台ALMA推進室)

本連載も100回目。節目を迎えるにあたって、これまでの活動を振り返り、今後の展望を語ります。

このコラムも今回で100回目を迎えました。連載開始からおよそ8年半、いつもご覧になって下さっている皆様に御礼申し上げます。今日から読み始めた方は、ぜひ過去の星ナビを探して読んでみて下さいね。

思い起こせば、「天プラ」として活動を始めたのは2003年の夏の事。全国の天文宇宙系の大学院生が集まる天文天体物理若手の会で、「天文学とプラネタリウム」というタイトルでポスターを出したのが、その始まりです。天文学分野の大学院生とプラネタリウムが協力する事で、新たなルートからの天文学の普及が行えないか。そんなことを提起する内容でした。その時に興味を持ってくれた仲間達と一緒にプラネタリウムの見学に行ったり、講演会を企画したり、天体観望会をやってみたり…なんとなくゆるーく活動が始まったのが、現在の「天プラ」につながっているのです。

天プラのこれまでの活動を振り返ってみると、ふたつの大きなターニングポイントがありました。ひとつめは、アストロノミカル・トイレトペーパーの制作です。当初、プラネタリウムとの共同戦線で天文学の普及を目指していた我々ですが、ほとんどの人はそもそもプラネタリウムや科学館に出かける機会がありません。そういった人たちにもアプローチするには、いったいどうしたら良いのか。その解のひとつが、トイレトペーパーだったのです。街の雑貨屋さんでも手に入れることのできるグッズを通じて、より広い層にアピールして行く。天プラがアプローチできる世界が広がった瞬間でした。サイエンスカフェのように、街中へ出て行われる活動も、この文脈の上で語る事ができます。

次のターニングポイントは、バリアフリーに対する意識です。トイレトペーパーやサ

イエンスカフェは、一般の方の手に届くところに天文学を持っていくという試みだと言えます。しかし、一般の方とは、いったいどこにいらっしゃるのでしょうか。あなたは、一般の方ですか？よくよく考えてみれば、私たちは皆なにかしらの特徴を持っており、決して一般の人と没個性な言われ方をされる存在ではないはずなのです。そこを意識して活動をデザインしないと、コミュニケーションは成立しません。そんな当たり前の事に気が付いた事が、大きな成長でした。身体的障害はもちろんの事、病院に入院している児童たち、小さな赤ちゃんを抱えたお母さん方、日本語を使わない外人さんなど、さまざまなバリアのために一般的なイベントには参加が難しい人達を発見し、その状況を理解し、超越する方法を考えていく。その後続くさまざまな活動で、常に意識される視点を手に入れたのでした。

超宇宙図プロジェクト

この二つの大きな意識の変革を経たことによって、天プラとして天文学の普及を行うための方法論は確立したと思います。しかし、そもそもなんのために普及するのか。天文学の魅力や、楽しみを、みんなと共有することの意義はいったいなんであるのか。私たちが天プラの活動に時間を費やすこと、人生を賭けることの意味をきちんと言葉にしたい。そんな必要を感じるようになってきました。

そのためにもどうしても必要だと思い、現在、私たちがもっとも重要視しているのは、天文学と社会、そして私たちの関係を再構築することです。我々はどこから来たのか 我々は何者か 我々はどこへ行くのか。この時空を越えた普遍的な問いに対して、私たちは天文学という立場からどのように答えようとして



いるのか。大きな物語の中で、天文学の現代的な意義を見だし、それに応じた天文学と社会の関係を、天プラに参加するさまざまな人達それぞれの立場から再構築していく。それを、誰のためでもなく、自分たち自身が生きていくために行っていく必要がある、そう考えるようになりました。

そういった文脈の中でもっとも大事だと思っている計画があります。それが、超宇宙図プロジェクト(仮称)です。宇宙図は2007年に、美術家の小阪淳さん、コピーライターの片桐暁さんと共同で作成した、宇宙を俯瞰するためのポスター。このポスターによって、天文学全体を俯瞰することができました。この宇宙図をさらに拡張し、天文学が世界とどのように関係しているのかを明らかにすること。そして、私たち自身をその関係の中に位置づけていくこと。それが、いま私たちがやるべきことであると考えています。

引き続き、天プラの活動については、本コラムを通じて皆様にご報告していきますので、今後ともお付き合いの程、よろしくお願い致します！